八ヶ岳西南麓に花開いた縄文文化。そのなかから、各館ごとにテーマを決めて展示するものです。
今回は「星降る中部高地の縄文世界～数千年をさかのぼる黒曜石鉱山と縄文人に出会う旅～」が
日本遺産に認定されたことを記念して、各館独自の切り口でその魅力に迫ります。

1 中期縄文文化の原型となった阿久ムラ

八ヶ岳美術館（原村歴史民俗資料館）

国史跡阿久遺跡は、縄文時代前期をとおしてのムラであるだけでなく、立石・列石を中核に据えた祭祀の場でありました。特に数多くの石が詰まった塊がドーナツ状に集まった環状集石群は、直径100mを超え、石の数は10万～30万個ともいわれています。
また、縄文時代前期の阿久ムラは、中期縄文文化を支えたムラの原型とも言えるものです。今回は、日本遺産「星降る中部高地の縄文世界」の構成文化財である阿久遺跡から出土した土器や、黒曜石で作られた石器等を中心に阿久遺跡の全貌をご紹介します。

2 この地に住んだ人々がのこした遺産と精神世界に迫る

富士見町井戸尻考古館

八ヶ岳西南麓に広がる縄文時代中期の「井戸尻遺跡群」。そこから出土する土器は世界で最も豪華な土器の一つとも言われています。
中部高地で産出する黒曜石が日本最古のブランドとして日本各地にもたらされるなかで、その麓で生活をしていた人々の生活の痕跡を見ると、縄文人の哲学ともいえる深い精神性の晶出した土器や土偶など、芸術性の高い遺物が多く見つかります。今回は藤内遺跡出土品や唐渡宮遺跡出土の人体絵画土器などを通して、この地に住んだ人々がのこした遺産と精神世界に迫ります。

3 土器につけられた顔

北杜市考古資料館

縄文土器には、ヘビやイノシシ、カエルなどの生き物や、U字の文様などで人体を表現したもののほかに人の顔をつけるものがあります。土器へ人面の装飾を施す風習は広く東日本に見られますが、山梨と長野はこの風習の中心地でした。
人面装飾は前期の初めから行われます。一方でこの頃の土偶には頭はあるものの顔の表現はないことから、人面装飾付土器には土偶による祭祀とは別の役割が与えられていた可能性があります。土器に実用的な道具としての役割とは違う意味を持たせていたと考えられる縄文時代。なぜ人面装飾付土器のようなユニークな土器が作られたのか考えてみましょう。

撮影：藤嶺雄輔